
監視者二人

無銘

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

監視者二人

【Nコード】

N5190Y

【作者名】

無銘

【あらすじ】

不可侵宙域の惑星の片隅で二人の男がたまたま出会う。どちらも何者かにより命ぜられそれぞれ別の男を監視してきた監視者だった。そんな二人が偶然出会い、そして何を話すのか…そんな小話。

（前書き）

設定にかなり無理がある上キャラ崩壊している可能性が大いにあるのでご注意ください。

時系列では大体『ビッグバトル』の前後という設定です。

アストラギウス銀河にある惑星アンティテーツ。

銀河最大の銀行を抱えるこの星はギルガメス、バララント両軍の立ち入りが制限される『不可侵宙域』に指定されている。

同時にギルガメス、バララント両陣営の外交窓口が置かれ、多くの外交交渉の舞台となってきた。

そんな星には軍人に関するある不文律が存在する。それは『街にしがらみや軍務を持ち込まない事』。

故にアンティテーツにある街ではギルガメス、バララントの両将兵が普段のしがらみを捨て普通に挨拶し合い、同じ場所で酒を飲み、時に談笑する。勿論諜報活動など御法度だ。

これはそんな星にある街の、バーの一角での出来事。

「…報告は以上であります」

「…苦勞」

アンティテーツにあるギルガメス側オフィスの一室。

メルキア軍情報部のキーク・キャラダイン中尉は上官で、現在はバララントとの会談の為にアンティテーツに滞在中のディーテル・ロイル・バツテンタイン中将に呼び出された。

そしてそこで小惑星リドで開発中奪取されたパーフェクトソルジャ

「（P S）に纏わる一連の事件についてバツテンタインに報告していた。」

キークはそれまで別の事件を担当していたが、前任者がバツテンタインにより更迭され行方をくらました後、それを引き継ぐ形で今回報告中の事件を担当していた。

報告を済ませた以上その任は解かれ、再び以前から担当していた『プランバンドール・スキャンダル』を担当する事になる。

「休暇：でありますか？」

「そうだ。休むのもまた仕事の内だ」

そんなキークだがいきなり休暇を言い渡される。確かに此処の所働き詰めだった。それに『死神』としての自分の直属の上官であるバツテンタインの言葉だ。キークは言われた通り休暇を取る事にした。

（とは言ったものの、何をどうしたもんか）

アンティテーツのある街の雑踏をキークは歩いていた。

特にやりたい事があるわけでも無いが、部屋でじっとしているのもそれはそれで癪なので半ば勢いでこの街へと繰り出した。

（こういう時は酒に限る、ってな）

とりあえずの行動方針を決めると、キークは近場にあるバーへと入った。

バーの中の閑散としていた。客は自分も入れて4、5人つて所か。そんな事を考えながらキークはカウンター席へと向かうが、一人の男が目に入る。バララント軍の制服を着た男だ。キークはその男の所へと歩き出す。

単なるバララント軍人なら別にキークは干渉する気は無かったが、彼なら…元同僚で面識のある彼なら話は別だ。そして声をかける。

「これはこれは。まさかこんな場所でまたお目にかかるとは思いませんでしたよ…ジャン・ポール・ロツチナ『大尉』」

「生憎だが今の私は『大佐』だよ、キーク・キャラダイン中尉」

その男の名はジャン・ポール・ロツチナ。元メルキア軍情報部大尉にして今はバララント軍の大佐である。

カラン、とグラスに入った氷が転がり音を立てる。

キークはロツチナの隣に座りグラスを持ちながら暫くロツチナと話していた。

「あんたが更迭されて姿を消したお蔭でこっちは色々大変だったんでね、嫌味の一つでも言ってるのかと思ってたんだ」

「それは君の上官：バツテンタイン中将に言いたまえ。私も忠告はしておいたのだがな」

キークがつい先ほどまで担当していた事件の前任担当者はロツチナである。バツテンタインに更迭された後ロツチナは姿を消し、バラント軍の大佐となっていた。

「しかしあんたも謎が多い。情報省の『コッタ・ルスケ』かと思えばメルキア軍情報部に、そして今ではバラント軍人だ。それも『神』の思し召しって奴か？」

「フツ、そういう事にしておこうか」

そしてロツチナはアストラギウス銀河を裏で操っていた『神』…ワイズマンの意を受けて動いていた。ある一人の男を追う為に。

「…キリコ・キュービー！。異能生存体、生まれながらのPS、神の子、異能者…そして神を殺した男」

キークはロツチナが追い続けてきた男の名を呟く。神の後継者に指名されながら神を殺した男だ。

「そのどれでもあつてどれでも無いのがあの男だ。何せ奴を語る言葉はあまりに多いが、奴が語る言葉はあまりに少ないのだからな」

そう語るロツチナの目は探求心に満ちていた。かつて自らの主人を

殺し、またロツチナ自身が一度は激しく罵倒した男に対するものは思えぬ程に、だ。

「何なら『ペールゼン・ファイルズ』ならぬ『ロツチナ・ファイルズ』でも作ってみたらいかがかな？」

「そうだな、老後の楽しみとしてでもとっておこう」

『ペールゼン・ファイルズ』とは異能生存体説の提唱者でありレツドシヨルダー創設者ヨラン・ペールゼンが書いた異能生存体の研究文書の事だ。

キークも一度目を通した事があるが、はつきり言って怪文書の類とは思えなかった。こんなのを信用したフェドク・ウオツカム情報省次官が破滅するのも無理はない。

「あんたもキリコ・キュービーという男の毒にやられたらしいな。ヨラン・ペールゼンのように狂い果てて死なない事を祈るよ」

「その心配は無用だ。私は彼と違ってキリコに手を出す気も支配する気も無い。私はあの男がどこへ行き着くのが見たいだけなのだから」

かつてヨラン・ペールゼンは死なない兵士の理想像としてキリコを求め、キリコのあらゆる支配を拒むその本質を知るや憎悪し、そして狂気と妄執の果てに死んでいった。

彼に限らずキリコに手を出した者は悉く死んでいる…ここにいるロツチナを除いて。

「好きに生きる私が羨ましいかね？ キャラダイン中尉。隠しても無駄だ。君は俗っぽさと青臭さを併せ持った男だ。だからこそメロウリンク・アリティという男に嫉妬し、憎悪し、そして羨望している」

「何故その名前を？」

「彼もキリコとはごく微々たるものだが接点があったのでな… ついでに調べたという所だ」

メロウリンク・アリティ…一機甲猟兵小隊による敵前逃亡並びに軍事物資強奪事件とされる『プランバンドール・スキャンダル』の関係者で渦中の小隊唯一の生き残り。

頑なに無罪を主張し続けた彼は軍を脱走し、現在は偽証した大隊将校たちへの復讐を敢行している。

キークはそれを利用して特命を遂行している…スキャンダル関係者の抹殺とスキャンダル自体の消滅というバツテンタインからの特命を。

故にキークは真実を知っている。メロウリンクが道化に過ぎない事も。だが軍からはみ出して尚自分の意志を貫くメロウリンクに憎悪や嫉妬、羨望を抱いたのはいつからだろうか。

「私も一度はキリコを嫉妬し、憎悪し、そして羨望した。だから君の内面はよく分かる」

キリコが神を殺した時、ロッチナはあの時の自分なら喜んで得たであろう絶対的権力をむぎむぎ捨てたキリコを嫉妬し、憎悪し、羨望した。

キリコもメロウリンクもロツチナやキークが選ばうとした道を、もしくは選ばざるを得なかった道をむざむざと捨てたという点では同類なのだと、ロツチナは考える。

そしてそれを憎んだかつての自分とキークもまた同類だと。

キークも駆け出しの頃には軍のはみ出し者だった時期がある。その時の青臭さを殺して今では軍人としての立身出世の道を選んだが、それでも完全にその青臭さを殺し切る事は出来なかった。

だからこそ自分と違って己の感情の赴くままに生きるメロウリンクを憎んでいるのだ。

「らしくないな。あんたがそんなロマンチストになっていたとは思ってもみなかったよ」

キークが肩を竦めて答える。

「或いはキリコ・キュービーという男の毒が、私の想像以上に回ってきているのかも知れないな」

ロツチナが不敵に笑う。

キークはやがてグラスの中のウイスキーを飲み干すと立ち上がり店を出ようとする。

「もう行くのかね？」

「ああ、明日から事件を追わなくちゃならないんでね」

「そうか…なら君の分は私が払っておこう。どうせ私はまだ暫くここに残るつもりだ」

「驚いた…どういう風の吹き回しで？大佐ともなれば金回りもいいって事かい」

「何、昔の知り合いのよしみと余計な仕事を背負わせた事への謝罪と『口止め料』代わりと思ってくれればいい」

「なるほど、流石に元上官のバッテンタイン閣下に自分がこんな所にいるとは知られたくないと」

「そんな所だ」

「ならここはお言葉に甘えさせて貰おうか…では改めて俺はここで失礼させてもらうぜ。また縁があれば会えるだろう…せいぜい達者でな、ジャン・ポール・ロツチナ『大佐』」

「フツ、私もまたいずれ君とお目にかかる機会があることを願っているよ…キーク・キャラダイン中尉」

そして互いに顔を見合せ不敵に笑い合うとキークは店を出て、ロツチナは再びカウンターで独り飲み始めた。

「若いな…」

暫く独りで静かに飲んだ後、ロツチナは誰に言うでもなく呟いてグラスのスコッチを飲み干すと二人分の代金を支払って店を出た。

二人が出た後、店はキークが入った時よりも閑散としているように感じられた。

アストラギウス銀河の惑星アンティーツにある街。此処には多くの軍人が敵味方の垣根を越えて集う。
だからこそ今回のような出会いも度々ある。

キーク・キャラダインは死に、ジャン・ポール・ロツチナが口をつぐむ以上、二人にとってこの出会いは何か意味があったものなのか、そしてキークに、ロツチナに何か影響を与えたのかは、誰にも分からない。

（後書き）

最後まで拙作を読んで頂き誠にありがとうございます。

今回このような作品を書くこと考えたのはキークがロッチナの後任として事件を追っていたという話を耳にした事がきっかけです。それでも情報将校二人が出会っていたら…と考えて書き上げた次第です。

最後にもう一度拙作を最後まで読んで頂いた事を感謝して後書きとさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5190y/>

監視者二人

2011年11月17日21時32分発行